スマート農業 積極導入

生まれた時間↓手作業に集中

鉄鋼メーカー勤務から就農

川島町の大谷さん ハウスでトマト栽培

ハウス内の大谷さんとトマト

【埼玉】川島町の大谷正成さん（39）は、2022年に独立就農してトマトを栽培している。

非農家出身の大谷さん。以前は鉄鋼メーカーに勤めていたが、妻の祖父が高齢で農作業が難しくなってきたことから、「自分たちにできることはないか」と一念発起して就農を決めた。

農業の知識がなかった大谷さんは、県農業大学校で野菜栽培の基礎を一年間学び、同時にスマート農業を実践するトマト農家で研修を受けた。

研修先の農家は隔離栽培技術の「ココバック栽培システム」を導入。ココナッツのヤシガラで作った培地に野菜などを定植し、養液で栽培するシステムで、土壌病害の発生を防ぎ、土壌に病害虫が入ってもすぐに培地を交換できるため、被害拡大を防げる。

大谷さんは農業大学校の実習で土壌由来の疫病によってトマトが全量収穫できない経験をしていた。そのため、「安定しておいしいトマトを供給したい」と初期投資を惜しまず、自身も同じシステムを取り入れた。

さらに、ハウス内の環境制御のため、スマートフォンから温度や湿度などを遠隔操作できる設備もそろえた。平準化・省力化につながるスマート農業技術を積極的に導入し、できた時間を手作業に集中する。「これまでは栽培に必死で、データ活用はこれから」と意気込む。

大谷さんのトマト栽培は、品種選びと健康な根、光合成のための大きな葉がこだわり。糖度が高く、食べた瞬間に果汁があふれる。販売先の量販店からも信頼され、特設コーナーを設けてイベントを開催するなど好評だ。「何事も全力でやることで、失敗も成功も次につながる」と大谷さん。地元の消費者においしいトマトを届けるため、試行錯誤して味に磨きをかける。

全国農業新聞 令和7年5月23日号 第8面 首都圏版